

工藤由貴子

生活の中にみられる慣習は、それを保有する家庭生活或いは社会生活とどのような関わりをもって存在しているのか、本研究はそれについて主に歴史的視点で検討することを目的としている。即ち社会的諸条件の特質の慣習への反映のされ方、歴史的な生活条件の変化、及び個人間での生活条件の差異が慣習に対して如何なる影響を及ぼすかといったことを明らかにすることにある。以上の課題のもとに出産と育育に関する慣習を素材とし、埼玉県の三沢という一地域での調査を試みに、既婚有子婦人全員に対して実施した質問紙調査によって地域全体としての外的諸条件の特質を捉え、時系列的サンプリングによる面接調査で慣習内容を把握して、その結果、今回考察した大正末期から現在という時間的範囲において、各慣習を変化という点から捉えると以下のように整理できる。① 歴史的な変化は昭和20年代後半から30年にかけての時期に最も顕著である。それは既産婦や行政レベルの活動、出産場所、家族内人間関係、生活様式の変化に規定されている。拡大家族的形態はその変化を抑える作用をもつ。② 同一時期における個人間差異は2、3の慣習内容の付随的部分にみられるに止まり、基本的には地域としての等質性が大きい。これは当地域の社会的特性を反映するものである。③ 今回考察した結果においては歴史的、又は個人的状況に依存性の高い部分も大きく、それが当地域の慣習の基本的特性として重要である。これは当地域の家族及び親族構造、職業における家族主義的経営、対象者の個人的資質の等質性、職業上の特質といった社会的条件を反映するものである。このように生活慣習は地域の生活条件と深い関わりをもって存在していることが示される。